

談 話 室

一般教育としての化学

川 浪 康 弘

今年4月から、一般教育の化学を担当している。しかも、これが私にとって初めての講義であり、どのような内容を、どのように講義したらいいのか未だに暗中摸索の状態である。私が大学で受けた講義は、化学専攻の学生を対象としたものであったから、この場合あまり参考にはならない。また、将来化学を専門としない学生が対象だからといって、ただ単に化学専攻の講義と同じ内容のものを少し程度を下げて教えればよいといったものでもないだろう。

そこで少しでもこの問題の解決への糸口をつかむために、受講者を対象にアンケート調査を行った。その回答の集計は以下の通りである。私の講義の受講者は、農学部、園芸及び農業工学科の学生で107名が受講している。アンケートに答えてくれた学生は、そのうち101名(回答率94%)であった。

高校では、さすがに理科系の学生だけに69名と半数以上が「化学II」まで履習している。ただその中で20名程、「習ったけれども、大学入試と関係なかったので勉強しておらず、理解できなかった。」といった注釈をわざわざ付けていたのが、興味深かった。共通一次学力試験で理科の選択科目として化学をとった者は、合わせて92名と非常に多く、次いで生物58名、物理44名、地学8名を大きく引き離している。受験勉

強という目的があったにせよ、ほとんどの受講者が「化学I」をかなり学習したと解釈してもいいだろう。実は、この化学の選択如何によっては、受講者の学力が異なるのではないかと心配していたが、92%が選択していたので、これは講義する上で非常に幸いであった。一方、「化学は好きか嫌いか？」という質問に対し、「嫌い」と答えた者の方が46名と、「好き」と答えた者(41名)より上まわっている。このことより、化学の好き、嫌い、化学の選択率の高さとはあまり関係ないことは明らかである。化学は嫌いでも受験の対策上、化学を選んでいる者がかなりいるのだろう。嫌いな理由として、一番多かったのが「複雑で、難しい。」や「覚えることが多い。」などであった。これらの学生は、化学的なものの見方、考え方を十分理解しないで、いろんな現象や化学変化を、雑然と断片的に受けとって「複雑である。」と感じ、「難しい」と思い、またいきなり丸暗記してしまおうとすると「覚えることが多い」というふう感じてしまうのではないだろうか。好きな理由としては「物質がいろいろ変化するのが面白い。」とか「実験が面白かった。」などが最も多かった。実験の教育効果については今更議論の必要もないが、改めて思い知らされた。例えば、ある化学反応を黒板上でいろいろ説明するより、実際に学生にその実

験をやらせた方が、はるかに説得力がある。

このアンケート調査を基に考えると、高校における詰め込み式の教育でなく、化学本来の理想的な形態である実験を中心とした講義をやればよいという結論がでるけれども、107名という大勢の学生を対象とする一般教育なので実験設備の関係上、実現不可能である。せめて教卓実験という形で、できるだけ多くの実験を経験できる機会を与えてやりたいと思う。また日常生活に関わる化学物質、例えば合成樹脂、合成繊維あるいは生体物質などを題材とすれば、より身近なだけに興味ももてるだろうし、ある程度体験的な理解ができると思われる。このためには従来の化学全般にわたって浅く広く触れるといったやり方では不可能で、思い切って項目を減らさなければならぬ。その代わり、より身近な現象や生活に密着した題材を盛り込みながら、基礎から丁寧に、系統的に説明できるのではないかと思う。このような考え方で、この1年

講義してみるつもりだが、さてどうなるものか皆目わからない。

アンケート調査の集計

(1) 高校での化学の履習状況について		
1. 化学Iまで		31名
2. 化学IIまで		69名
3. その他		1名
(2) 共通一次学力試験理科の選択科目について		
1. 化学と生物		49名
2. 化学と物理		41名
3. 化学と地学		2名
4. 生物と地学		6名
5. 物理と生物		3名
(3) 化学は好きか、嫌いか？またその理由		
1. 好き		41名
2. 嫌い		46名
3. どちらともいえない		14名

ず い そ う

小 林 立

しゅうぶん

「広辞苑」をひいてみると「しゅうぶん」という日本語には「周文」「秋分」「修文」「醜聞」「繡文」の五つの単語が掲載されているが、ここでいう「しゅうぶん」はむしろ「秋分」や「繡文」などではなく「醜聞」のことである。新聞・テレビなどを通して

毎日いろいろな出来事が報道されている。その中には大学関係者による創造的な研究成果についての報道も多くあるが時おり「醜聞」に類する事件についての記事を見かけることがある。少し思い起してみると入試問題漏洩、裏口入学紹介、成績原簿改

窟、教授採用を巡る収賄、論文の盗用、実験データ捏造、恋愛事件、理事殺害事件などがある。失敗をしない人間はいないという。失敗はいわば人間が活着していることの証であるとも言えようが、“人のふり見て我がふり直せ”という言葉には謹聴すべき千鈞の重みがあると思われる。

“傍目八目”とも言って、どうしてそんなバカなことをやるのか常識で考えて分りそうなものだと傍目には思われることでも当事者は大真面目であり、相応の理屈があったりするに相違ない。しかしひいき目に見ても非常識である場合には、やはり批判と自己批判は不可欠なものとなるだろう。国語が学習と経験によって身につくように常識も結局は学んで身につけるものであって先天的に備わっているわけのものではないようである。“アベロンの野生児”や“狼少女”にいわゆる常識を望んでも無理であろうし、その言動は“気狂沙汰”としか映らないに違いない。“不学不成材”といわれる所以は正にそこにあるのではあるまいか。

教師と学生は師弟の関係にある。この師弟関係については“三尺下がつて師の影を踏まず”という言葉もある通り、両者の間に一定の距離があってこそ学生も敬意を以って教師の指導を受け入れることができるに違いない。そして“三尺”という距離も倫理的には無限大の意味をもつものである。ところが教師が恋愛事件などこの“三尺”の距離を無視する行為をやれば“木に縁りて魚を求む”るが如き常軌を逸した破廉恥漢となることだろう。教師としての權威は地に墜ち、大学の面汚しとして世間の物笑いの種となるに違いない。

中国の古詩に“瓜田に履を納れず李下に冠を正さず”という。疑惑を招く行為は厳

しく避けるよう注意を促している詩句である。だが“瓜田”や“李下”にある場合は如何に注意を払い潔白であっても“下種の勘繰”という言葉もあるように“痛くもない腹を探られる”ことは免れ得ないことであろう。ましてや不始末をしでかしたとなれば“鶉の目鷹の目”で以って前科と余罪を追求され“泣き面に蜂”の状況に陥るのは必至であろう。正しく“禍は不徳より生ず”である。そうなってから悔い改めて“後の祭り”であろう。

“新聞種”となった大学関係者のその後については追跡記事があまりないので分らないが恐らく刑事責任と共に大学の名誉を著しく傷つけた道義的責任を厳しく問われているに違いないと思われる。“新聞種”となった大学関係者には職制でいえば大抵は教授などの場合が多いことから“大物”であることが必要条件となっているようである。専門分野における権威者とか国際的に有名な芸術家であるとかさまざまなケースがあるが、まさかの時には研究業績や才能はともかくやはりその人の常識が問われていると言えそうである。しかも“醜聞”が表沙汰になる前から、いろいろウワサが聞かれたという場合もあるようだから事件は必ずしも突発的なものとは言えないのかもしれない。しかし評判の芳しくない人物には誰しも“君子危うきに近寄らず”という気持ちを抱くのは人情であろうから、問題の人物はいよいよ歯止めを失い、遂には“新聞種”となるまでにエスカレートすることになったのかもしれない。

思うに研究者に求められる自由な発想というものは常識とはまた異質のものではないだろうか。研究はあらゆる可能性を探求し発見することが生命であろうが常識は規

範の性格をもつと言えらるうから自由な発想と常識との間には鋭い対立関係があるに違いない。実験室の研究成果は常識のはるか先を走っているのが通例であろう。それ故に倫理的規制が必要になる研究もあるわけではなからうか。長年、研究生生活に専念する間に研究に求められる非常識性といわゆる常識との区別がつかなくなる危険性

煙突のけむり

今日も煙突の先から薄茶色のけむりがたちのぼっている。広場には金色の霊柩車と黒の乗用車・タクシーが並び、黒服に身を包んだ人々の姿が見える。冬の寒い時期、特に多い光景である。高松琴平電鉄の志度線に沖松島という無人駅があり近くに市営火葬場がある。火葬場の南側は御坊川が東に流れて詰田川に合流し瀬戸内海に注いでいる。地図で見ると市営火葬場は沖松島駅と同じ福岡町四丁目に位置しているのだが町内には沖松島の名を冠した公園が東公園、西公園、南公園と三カ所もあるから以前は沖松島という町名だったのだろうか。その沖松島駅ホームの西北に看板がたっていて“沖松島より火葬場を撤去せよ” “市長は地区住民との約束を守れ” “葬斎場同地区内移転反対期成同盟” “沖松島自治会” という文言が目に入ってくる。

故人の遺体をどう扱うかは文化や時代によって処理法も異なり、火葬、土葬、水葬、風葬といった葬法があるという。日本でも古くは土葬だったが仏教の伝来によって火葬が貴族・僧侶階級に普及し畿内を中心にして全国に広まったといわれる。従ってその頃、火葬場も誕生したことになる。“棺を蓋いて事定まる” というのは土葬の時代の

もあるのかもしれない。採用人事に金銭を動員したり、研究成果をあげるため実験データを改竄するのは確かに非常識には違いないが研究における自由な発想に一脉相通する所がありはしないだろうか。これらは“専門バカ”の極端な事例かもしれないが、“他山の石”として貴重な教訓を与えてくれているのではないかと思われる。

言葉に違いないが“骨を拾う”は火葬になってから生まれた言葉だろうか。昔は燃料も薪が主だったろうから茶毘にも時間を要したことだろうが今日では海外から重油を運んで来て用いるから瞬間に遺体は無残な白骨に変り果ててしまう。焼却炉の鉄扉の閉まる音は、永久の別れを告げる故人の最後の声であり遺体を火中にくべる後ろめたさを覚える一瞬である。そしてまた数十分後に相まみえる故人の白骨はこの世に生きていることの喜びを骨身に沁みて感じさせる瞬間ではないだろうか。

公務員宿舎に住んでいると隣近所に引越しがよくある。これは国民を移動させる代りに国家公務員が定期的に転勤する制度によるものである。同じく国家公務員であるが国立大学の教官には転勤がない。その代り受験生がいずれの国立大学でも自由に志望できる制度になっている。こうして毎年大規模な人事交流が行われているのである。もちろん国立大学には旧制と新制、都会と地方といった違いはあるものの共通一次、入学検定料、授業料などすべて一律平等である。はるばる日本の各地から香川大学を志望して来た学生の下宿、アパート、寮などその生活環境の整備に留意すること

は国立大学たるものの責務であることは言うまでもない。

国立大学の教官には制度として転勤がないからかよく聞く言葉に“ご出身はどちらですか”という質問がある。そういう問いには先祖の墓所を出身地として答えれば正解だろうか。地元出身でない限り墓地は遠隔地にある。従って国立大学の教官たるもの“骨を埋る豈墳墓の地のみならんや”という気概が必要とされているわけである。三十歳前後で香川大学に奉職したとすれば定年退官まで三十余年前後の間、勤務できる。香川大学が母校でない教官にとっては着任してしばらくの間は出身大学の方がなじみが深い数年すれば香川大学の水にもなれ、十年もたてば完全に香川大学の教官になれるだろう。たとえ地元出身でなくとも勤務年数が長くなれば地域社会との関係も深まり、専門の学識を活かして地域社会の発展に協力、貢献する機会も多くなるに違いない。かくして県立大学、市立大学の教官にまさるとも劣らぬ地域に根差した活躍をされる教官が多数輩出する。一口に三十年と言うが一世代の長さであり人生の最盛期にあたるわけだから第二の故郷と思うようになって定年退官後も踏み止まり大学

と地域社会のため尽力されている場合が多く見られても不思議ではない。三十余年間、香川大学に奉職するとなれば品性、能力、健康の大切なことは勿論であるが就中、良好な人間関係は重要な意味をもつと言って間違いはないだろう。そのためにも後ろ指を指されるようなことは絶対にしたくないものである。

最近は独身の教官であっても公務員宿舎に入居できるようだが家族が増えると手狭に感じて自分の家を建てて移り住む教官も多い。住宅金融公庫のローンを借り長期的見通しを持つと墓地もほしくなる。しかし宅地とちがって新聞広告もあまり見ることがないから墓地の入手は難しいのかもしれない。そうなると寺院か公営納骨堂に入るしかなく火葬が最適ということになる。新聞の死亡公告を読むと某々病院で死去という場合が非常に多く、自宅で老衰により天寿を全うすることはもはや今日においては至難の業なのだろうか。

故人の冥福を祈るのは冥土を想定してのことだが火葬場を巡っての問題は故人が冥福を享受する上で何か影響を及ぼすことになりはしないのだろうか。一市民としても気掛りなことである。

けいむしよの塀

高松琴平電鉄の志度線に松島二丁目という駅がある。駅のすぐ北側に周囲を高く厚い塀を巡らした高松刑務所の正門と建物が電車の窓から見える。四国新聞社刊「香川県大百科事典」によると収容人員はおおむね八五〇人前後、丸亀拘置所を併置、職員は丸亀支所を含め約二三〇名という。以前は刑務所の塀も東隅の監視楼も直接電車か

ら見えたものだが今では刑務所の南側にあった空地にも人家が建って乗客の視界を遮っている。やはりあの空地は国有地ではなく民有地だったようである。最近のように各種の事件が多いと全国的に刑務所の収容能力や増改築などが問題にならないのだろうかとふと思ったりする。

刑務所に入るにはそれなりの理由と経過

があるのだろうが最初に入る警察署の留置場は代用監獄といわれるが別名“豚箱”とも呼ばれる。世間にとって容疑者はもはや“人間”ではなく徹底的に解剖し取り調べる“豚”でしかないからだろうか。況んや確定判決により拘禁される既決囚ともなれば“豚”以下ということになろう。従って刑務所の高く厚い塀は囚人の脱獄を阻止するためというだけでなく、世間による私的制裁から受刑者を保護するという意義もあるのかも知れない。

高松刑務所は地図で見るとほぼ正方形の敷地がある。当初、高松港附近にあったが明治31年高松港改築のため現在地に移転、昭和20年戦災で焼失、昭和51年改築工事が完了し現在に至るといふ(「香川県大百科事典」)。

獄舎はいわば“人間金庫”であるから風水害や地震にもびくともしない堅固な構造になっているに違いない。テレビなどで見る監獄の頑丈な鉄格子や鉄扉には重厚な雰囲気があるが監房内なども市中銀行の店内のようにテレビカメラで撮し出し、寝言も聴取できるような設備をすれば万全の監視体制と共に情報収集にも役立つのではなかろうか。

受刑者の一日二十四時間は規則正しい日課に従い、厳格な規律と厳重な監視の下に生産労働に従事しているという。刑務所はよく“別荘”ともいわれるようだが、やはり“働かざる者は食うべからず”の言葉の通り、刑務所は一大生産工場でもあるわけである。高松刑務所では時々、矯正展を開催して受刑者の懲役による製品を展示即売することがある。日用品をはじめ、木工製品などは勿論のこと墓石も陳列されており、種類の豊富さ、値段の安いことなどな

かなか人気があるようだ。入試問題等の印刷にも刑務所が秘密保持には最適である。受刑者はこれらの作業を通じて手に職をつけ社会復帰の日に備えているに相違ない。終身刑とか死刑因でない限り受刑者はいつか刑期満了を待って出所できるわけだが最近の報道によれば模範囚は刑期満了前でも仮出所させ保護観察の措置をとって社会復帰に役立たせるようにするという。これは刑務所が定員以上に拘置する状況の解消、経費の節約、受刑者の社会復帰を援ける、という“一石三鳥”を狙った措置だといわれる。

考えて見ると仮出所であれ刑期満了であれ、その社会復帰には何よりも世間一般の深い理解と協力が必要であろう。己れの犯した罪を深く悔い改め如何に模範囚として服役し出所したとしても世間は前科者をそう簡単には“人間”扱いしてくれるとは限らないのではあるまいか。それに多年にわたる“別荘”暮らしは受刑者をして浦島太郎にしていることでもあろう。従って受刑者が釈放されて後、如何に社会復帰を上げてゆくかは一つの重要な社会問題であり、社会復帰に躓けば再犯・累犯の路をたどり、また刑務所へ逆もどりすることにもなりかねまい。“前科何犯”という犯罪者は繰り返し社会復帰に失敗した前科者の哀しい姿だとも言えなくはない。してみると出所後の社会復帰の過程を保護観察することは刑期満了、仮出所のいずれであれ事後措置として不可欠なものではないかと思われる。

犯罪のニュースが新聞、テレビで報道されぬ日はないと言ってよいが、検挙された犯人の初犯・再犯の割合はどういう比率になっているのだろうか。状況によっては誰でも犯罪を犯しうる“可能性”を内に秘め

ていると言えるのかもしれないが、一度、罪を犯して逮捕されれば世間とは千里の距離が生まれ永久にその差は縮まることはないのではないか。逮捕された犯罪者は先ず公権力による刑罰を受け、次いで出所後は世間一般による“刑罰”を受けることになるのではなかろうか。従って現在、刑務所で服役中の受刑者は刑罰全体から見ればまだ前半の部分を服役しているにすぎないの

だと言えるのかもしれない。

刑務所のあの高く厚い塀と監視楼は電車の窓からはっきり見える方がより教育的ではなかったかと思う。しかしまた刑務所の塀をあたかも庇うように立ち並んでいる人家と建物は受刑者との深い溝を少しでも埋めようとする思いやりのようにも感じられるのである。

講道館柔道、タイを往く——その3

村田直樹

アヤさん——。

この言葉を読者諸兄姉の先生方はご存知であろうか。タイへ行かれたことのある方なら初耳ではあるまい。

何と説明しようか。

子供をあやすところ、うきた名称では、と国際交流基金の人から聞いたことがある。なるほど、そうかも知れない。しかし、アヤさん、子供をあやすばかりで終日暮らす訳ではない。炊事、洗濯、掃除、買物、そして子供のお守等、日本の主婦の為る仕事の殆どをこなすタイ人女性である。

バンコク在住日本人、欧米人、その他外国人家庭に雇われて働く。住込みも通いも両方ある。年齢もまちまちで10代から始まって上は知らない。年齢がまちまちなら美醜もまちまち。美人も居れば醜女も居た。言葉はどうか。英語か日本語を話す。そういうアヤさんは給料が高い。多くはタイ語一辺倒である。

そのアヤさんにまつわる話を今回は記し

てみよう。メナムの風に乗って……。

バンコクの中央通り。それがスクンヴィット通りである。ダウンタウンに向かい動脈の如く走っている道。

その動脈には支脈もある。ソイと呼ばれる路がそれ。ソイには番号が付けられていて、スクンヴィットの両側を、片側は奇数、片側は偶数となっている。ソイの小路は道路を隔てて必ずしも対応していない。ソイ5の対面にソイ6はないのだ。

大動脈スクンヴィット通りには高級住宅が並び建つ。外国人居住者が多い通りということである。

スクンヴィット・ソイ47。私の止宿先はそのスクンヴィット通りであった。高い塀に囲まれ、入口には守衛が居、中に入れば広くゆったりした駐車場、その奥に芝が広がりがヤシの木と、その木蔭にプールが在った。

私の契約した部屋は一階で、芝を隔てて

プールに面し、ながめ最高。何故ならこのアパート、欧米人家族が幾組か居て、ヴィキニの金髪ギャル達が毎日の様にプールサイドで戯れるから。

部屋は広かった。30畳も有ろうかと思われるリビングルームは光沢麗しきラワンの板の間。素足にヒンヤリ気持好い。ベッドルームはそのリビングルームをはさんで2部屋あった。そして各々にバスルームがついている。キッチンルームは一つ。

——ずい分広い部屋だなア。寝る所が2つもあるじゃないか。ベッドもダブルで。こりゃーいいぞ。さて、噂に聞くアヤさんだが、どうやって雇うのかな。できれば若いピチピチギャルで、住込みがいいぞ。何故かって？ウッヒッヒ。知らないよ……。

そんな独り言をつぶやきながら旅装を解いていると——。

「ハロー、ミスター。」と中年男性の声。振り向けば中年男性と中年女性がニコニコ笑いながら立っている。

(まさか/まさかまさか/あの脇の……)

「このアパートの管理を任されている者です。よろしく。この女がこの部屋付の掃除人です。一ヶ月700バーツ(約7000円)ね。食事を作らせるンならもう少し高くなるけど……。」と中年男性。

(やはりノ)

と叫ぶ内なる声はグッと飲み込み精一杯の落ち着きと笑みすら見せて、

「Oh, サンキュー。じゃアそうする。掃除と洗濯だけ頼む。食事はいいよ。」と私。

何だか訳の分からぬうちにアヤさんが決まってしまった。——面白くも何ともないな。

朝が来た。昨日のアヤさんが昨日の様に、中年の顔をしてやって来た。私は起きぬけで、まだ裸。何も着けていない。恰度、バスルームへ行き掛けの処にやって来たのだ。

「Oh, ミスター。ご免ご免。でもイイ身体してるねエ！」としげしげ見つめ入る。

「そーかい。サンキュー。柔道のお蔭さ。」と私も別段そのまま歩きながら応じたものだ。

トングという名のその中年アヤさんは、昨日の管理人の妹で、同居しているという。管理人一家はアパートの隅の一室を与えられ、裏手の方に住んでいた。

アヤさんトングは両手に箒を持ち、まるで二刀流の如く巧みに捌きながら各部屋を掃くのだった。私はその光景をただ見つめていた。

日本流に言えば、家政婦か——。

私にとっての初体験。家政婦なんて雇ったことがない。今、目の前でタイのその家政婦サンが働いている。

私は何とも奇妙な面持ちになっていた。世間話の一つもしたいのだ。しかし言葉が通じない。彼女はタイ語しか話さない。こちらはタイ語、まるで駄目だし。

シーン。沈黙の中にジャッシュジャッシュと箒の音。時々向こうとこっちで顔を見合わせばお互いニヤッと笑うだけ。そしてまたシーン。

そのうち、

——何だか、掃除して貰っちゃって悪いなア。何かあげようかなア……。

などという気持におそわれてきた。そしてタイ語をやらないと駄目だね、こりゃーとも。

かくして私はアヤさんトングなる女性を
雇い、バンコク暮らしのスタートをきるこ
とになったのだが、或る日二人のタイ人女
性を同じアパートの敷地内で見掛けること
となる。一人はまさに明眸皓齒。一人はそ

の肌浅黒きまさに食べ頃のお色気権化。

聞けば共にここで働くアヤさんと言うで
はないか……！

——つづく——